人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	学校全体として人権尊重の視点に立った学校づくりが組織的かつ効果的に進められている実践事例

１．基本情報

○都道府県名及び市町村名

山形県村山市

○学校名

村山市立西郷小学校

○学校のＵＲＬ

http://www.city.murayama.lg.jp/kurashi/gakko/sho_chu/nishigo_es/

２．学校紹介

○学級数

【通常の学級】通常学級：１～５学年，１学級　６学年，２学級
【特別支援学級】１学級　【合計】８学級

○児童生徒数

【全校生徒】　１８５人（平成２５年１２月１日現在）
（内訳　１学年：31 人　２学年：22 人　３学年：24 人　４学年：32 人
　　５学年：30 人　６学年：46 人）

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】
「進んで勉強しよく考える子ども」
「明るく心豊かな子ども」
「たくましくねばり強い子ども」
―気付き　考え　実行する子ども―
【人権教育に関する目標】
「互いを認め合い、共に生きる子どもの育成」

○人権教育にかかる取組の全体概要

Ⅰ　人権教育の理念に基づき、子供の心を豊かにする道徳教育
人権教育の理念に基づく道徳の授業を充実させ、豊かな人間性の育成に努める。
Ⅱ　地域素材（自然・文化･人材）の活用
地域社会の中に生きる一員として、自分のできることや自己の生き方について考える子供を育てる。
Ⅲ　居心地の良い人間関係を作る学級経営

温かい人間関係の形成と自己存在感を高める学級経営に努める。
Ⅳ　互いに協力し合う児童会活動
コミュニケーション能力を高め、お互い協力し合って諸活動に取り組む児童を育てる。

３．特色ある実践事例の内容

（取組のねらいや目的）

本校では、山形県で推進する「いのちの教育」や村山市の学校教育の方針、児童の実態等を踏まえ、「心と心が通い合う明るい学校」を目指している。

心と心を通い合わせるためには、児童一人一人の心を耕す必要がある。そのためには、自分自身を大切に思う自尊感情を育むことが大切である。自尊感情を持つことにより、自分だけでなく、他者の良さを認める態度を育むことにつながる。

また、お互いの価値観を尊重しようとする意思や態度は、「自分は他者に認められている」「仲間の中で生活している」という証しとなり自己存在感の確立を促す。

この二つのことが子供同士の豊かな関係を築き、共に生きる子供を育成することができると考える。

（取組の内容）

◇授業研究会

人権教育の理念に基づく道徳の授業を充実させ、豊かな人間性の育成に努める。一人２回の授業研究会を行い、道徳教育の在り方を研さんする。

以下の目指す子供像に迫るために視点を設けて、実践に当たる。

道徳教育における目指す子供像

○低学年…相手の気持ちに気づき、だれとでも仲良く活動する子
○中学年…相手を認め、自分の考えをしっかりもち助け合う子
○高学年…相手の身になって考え、互いに尊重しあう子

◇主な実施例（６年２組の実践）

１．主題名　仲間の存在が自分を高め，自分のがんばりが仲間を高める
＜友情２－（３）＞

２．資料名　左手一本のシュート（小学館）

３．ねらい　田中正幸君の努力とそれを支えたチームメイト（仲間）の気持ちを感じ取ることができる。

４．本時の指導

時間	学習活動	主発問◎　発問○　指示△ 児童の反応・	指導上の留意点（・） 評価（□）支援（※）
5分	1．実生活から資料へとつなげる。	○ 仲間がいて良かったなあと思うことはありますか。	◇ 事前のアンケートなどを想起させたり，実体験などを想起させる。
25分	2．資料「田中正幸君」について状況をつかむ。	○ 何でこんなに喜んでいるのでしょう ・逆転のシュートを決めたから ・試合に勝ったから ○ ケガをした後，体育館に通い続けたのはなぜですか ・またプレーしたいから ・復帰しようと思っているから ○ チームのために頑張る正幸君，努力し続ける正幸君のためにどんなことをしてあげたいと思いますか。 ・ゲームに出させてあげたい ・全国大会に連れて行ってあげたい ◎ 何でこんなに喜んでいるのでしょう ・努力が報われたから ・自分のことのように思えたから	◇ プロジェクターを使用し，映像などをわかりやすく提示する。 ◇ 大事な画像は，黒板にも提示する。 ◇ 田中君の努力をまわりのチームメイトも理解していることに触れていく。 ※ 発言しにくい子には，似たような考えに挙手させるなどして 考えをもたせる。 ※ 考えられる児童には，実体験と関連させながら発言できるようにさせる。 ◇ 最初と同じ発問をすることで見方や考え方に変化を促す。
15分	3．仲間について考えたことをまとめ，自己の行動を振り返る。	△「仲間について学んだこと，そして考えたこと」を書きましょう。 ・お互いに信頼しあうことが大切。 ・お互いを理解することで困難を乗り越えることができる。	◇ 田中君たちのことと自分のことを分けて記入させる。 田中正幸君とチームメイトの気持ちから，仲間の大切さを感じ取ることができたか

Ⅱ 地域素材（自然・文化･人材）の活用

（取組のねらいや目的）

地域社会の中に生きる一員として、自分のできることや自己の生き方について考える子供を育てる。

地域に昔から伝わる伝統行事に取り組んだり、地域学習を行ったりすることにより、ふるさとをより深く考えることになり、ふるさとの伝統を大切に思う心や地域を願う人々の思いを感じ、地域への愛着を深める。

（取組の内容）

◇河島山の地域自然の探索

歴史学習と兼ね合わせ、古墳時代、鎌倉時代などの地域の様子について見学を行う。

地元のボランティアガイドへ講師を依頼し、歴史的価値や地域のすばらしさを伝えてもらう。

低学年においては、ドングリなどの植物の実や草木など様々な里山の自然とふれあうことによって、自然の良さを体感したり一緒に遊ぶ仲間の良さを感じたりさせる。

◇徳内踊り、杉島諏訪太鼓などの地域伝統文化へのかかわり

地域で取り組む徳内踊りを実際に踊り、「あおぞらフェスティバル」（文化祭）において家族や地域の方々に伝える。地域の方々に生演奏を依頼し、徳内祭りさながらの環境で実施する。

クラブ活動の中に、太鼓クラブもあり、地元で行われている太鼓の演奏を地域の方々に教えてもらい、練習に励んだ。

Ⅲ　居心地の良い人間関係を作る学級経営

（取組のねらいや目的）

人権意識を高め、温かい人間関係の形成と自己存在感を高める学級経営に努める。そのために実態把握と児童理解を客観的に行う手立てを講じる。

また、児童相互のコミュニケーション能力を身につけさせ、望ましい人間関係を築くことができるような自主的、実践的な態度を育てる。

（取組の内容）

◇Ｑ－Ｕアンケートの活用

全校児童に対してＱ－Ｕアンケートを実施し、学級全体と児童の満足度などの状況を客観的に把握し、学級経営の指針や児童への対応の資料とする。年間に２回行い、学級の状態などについて変化を把握する。

また、温かな人間関係づくりや学級づくりのために外部講師を招いての研修会を開催する。

◇ＳＳＴ（ソーシャルスキルトレーニング）

Ｑ－Ｕアンケートや日頃の観察などから、浮き彫りになった課題に対して、学級や児童に応じて適切な行動がとれるようにＳＳＴを実施し望ましい行動規範を身につけられるようにする。

Ⅳ　互いに協力し合う児童会活動

（取組のねらいや目的）

コミュニケーション能力を高め、お互い協力し合って諸活動に取り組む児童

を育てる。児童会活動では、縦割り班を基本に活動し異学年交流を通して協力の大切さを感じさせる。

また、高学年においては、ボランティア活動に取り組み学校のため全校生のためという意識を持たせる。

（取組の内容）

◇お互いを尊重し合う縦割り活動

月に１回程度、縦割り遊びを実施する。縦割り班ごとに「安全」に「みんな」が「楽しめる」ことを考え、遊んでいる。

また、年に１度縦割り班で芋煮作りを行う。持ち物や仕事の役割を分担し、協力して作り上げる大切さを感じさせる。

清掃活動も縦割り班ごとに実施し、上学年が下学年に教えながら掃除をすることの大切さを味わわせる。

◇さわやかなあいさつ運動

大黒柱（運営）委員会が中心となり、毎朝あいさつ運動を実施する。さわやかなあいさつを響かせ、明るい学校生活が過ごせるように、声を交わす。

強調月間の際には、「あいさつ大作戦」（20 人以上にあいさつをしよう）や「あいさつカード」（10 枚集まると賞状）といった活動を行い、意識づけを行っていく。

４．実践事例の実績、実施による効果

・人権教育の理念に基づく道徳の授業を行った。特に、生命尊重や他者意識（思いやり、親切など）に関する分野に力を入れて取り組んだ。
・河島山探索により、学年ごとにそれぞれの良さを感じさせた。低学年は季節の移り変わりの様子や自然環境の豊かさ、高学年は、地域の文化の高さや先人に対する誇りを感じさせることができた。
・徳内踊りや太鼓演奏では地域文化に触れさせた。「もっと早くからやっていたかった。」という子供たちの声が聞こえた。地域文化のすばらしさを感じることができた。
・Ｑ－Ｕアンケート及びその研修により、自分の学級の状態について客観的に把握することができた。年間に数回行うことで、学級の変容を見ることができた。
・低学年や特別支援学級児童を中心に、ＳＳＴを実施した。特別支援学級では、「ぼくの好きなところリスト」を書き、自尊感情が高まるような取り組みを行った。

５．実践事例についての評価

〇成果

・道徳の時間を中心にして、６回の校内授業研究会を行った。「自分自身のよさを生かし精一杯生きる」「かかわりを持って共に生きる」という人権意識の高まりが見られた。教材の開発にも力を入れて行ったため、心が揺さぶられ、児童の心に響く授業が展開された。児童も真剣に授業に臨んだ。

・多くの地域文化があることを児童自身が知ったことが何よりの成果である。地域の中に住んでいるという意識が高まり、地域への誇りを持つようになった。その中で自分ができることは何かを考え、あいさつ運動などを通して地域の方々への感謝を伝えようという意識が高まった。

・Ｑ－ＵアンケートやＳＳＴなどを通して、自尊感情を高める手立てを取ってきた。学級満足群の児童が大幅に増えてきた学級も見られ、学級がいい方向に変容することができた。

〇今後の課題

・計画的継続的な取り組みが行えるように、教育活動にきちんと明記していくこと。特に道徳教育は、教育活動全般にわたって行うべきことなので、教科他領域等との関連をきちんと図っていく必要がある。

・家庭や地域に対して、自尊感情を育むことや他者のよさを認める態度を育むことなど、人権意識を高める大切さを、学校として啓発していく必要がある。授業参観やお便りなど、取り組みやすいところから、発信していく体勢を取っていきたい。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

村山市立西郷小学校
本校では、「自分は他者に認められている」「仲間の中で生活している」という思いを児童が抱けるように、さまざまな手立てを尽くしている。報告で特に取り上げられている「左手一本のシュート」は、15 歳の時に襲われた脳出血による右半身麻痺という状況を乗り越えるべく取り組み、高校三年の試合で再び左手でシュートを決めた、という田中正幸さんの事例である。彼は、その後大学に入学し、福祉を学んで地元の山梨に帰りたいと述べている。周りの支えもあって、障害者を取り巻く困難状況に負けず、地域に生きる例として、貴重であろう。この事例が象徴しているように、本校の取り組みは、全ての児童の自尊感情を育み、困難に負けない力（レジリエンス）を培おうとしている。そのための手立てとして、アンケートを実施し、その結果を踏まえてソーシャルスキルトレーニングを位置づけている。